

「札幌北一条教会の礼拝」

2013年12月小会

I. 礼拝式について

1. はじめに

この小冊子は日本キリスト教会札幌北一条教会の礼拝式とその構成要素について教員が理解を深め、礼拝の充実に資することを願って作成されました。礼拝については日本キリスト教会憲法において「小会が決定する」と規定されていますが、各教会の礼拝に準用される資料として日本キリスト教会教義研究委員会の「礼拝式順序に関する細かい指針」（1967年）と「信仰と制度」に関する委員会の「礼拝式に関する原則的な試案」（1998年）が大会に報告されています。さらに当教会においては1985年研究委員会の「教会の基本姿勢」、2002年礼拝・祈会委員会の「礼拝式の意味」が礼拝の在り方について研究結果を報告しています。この小冊子は以上の報告にみられる日本キリスト教会の礼拝観に基づき、更に長年の当教会の礼拝式の在り方に思いを及ぼし、2011年以降の教会内での取り組みを経て、2013年度の小会において決定されたものです。

2. 礼拝とは

礼拝はその本質において神の制定（十戒の第1、第4）に基づくものであり、人間の意図的な行事ではありません。礼拝を備えてくださるのは神ご自身であり、わたしたちはその招きに応じて参加することが求められています。礼拝における神の招き、罪の贖いと救いの約束、説教と聖礼典などはすべて神の和解に基づく出来事であり、それを根拠として礼拝は成り立っています。わたしたちはこの恵みの出来事にあずかる光栄と喜びが与えられています。このよ

うに礼拝は神の招き（招きの詞）に始まり、神の恵みを新たに受けた信徒が再び祝福を受けてこの世へと遣わされること（派遣・祝福）によって終わります。このことが見失われるとき、礼拝はキリスト教の講演会や集会にとどまってしまう。

なお、わたしたちの教会では教会はすべての人々に開かれたものであり、主日礼拝では新しく教会に来られる人々を受け入れ、神のことばを伝える大切な伝道のときとしてきました。

3. 礼拝の内容

礼拝は神の行為とそれに基づく信徒の応答によって構成されます。すなわち「招きの詞」と「派遣・祝福」にはさまれて、聖書朗読、神のことばの告知としての説教、聖礼典などの救いの恵みが差し出されます。それに対して、礼拝者であるわたしたちはみことばを聴くこと、賛美・告白・祈り・献金などによって応答をしてゆきます。このように神と人との対話的な応答の積み重ねによって礼拝は進行し、一回一回の礼拝を通して信仰者は新しくみことばに生かされるものとなります。わたしたちは礼拝の特定の部分にだけ関心を寄せることなく、礼拝全体に真摯に対応することが求められます。歴史的にみて、日本キリスト教会では説教が重視されるあまり、他の要素が軽視される傾向にあったことが反省されます。

4. 公同性

日本キリスト教会は憲法前文において地上の教会は「全世界・全時代の聖徒からなる」、「聖なる公同の教会」であると告白し、教会の「公同性」を大切にしてきました。

聖書には「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」（ガラテヤ 3：28）とあります。

公同性は礼拝を形成する基本的要素です。礼拝に参加する信徒は神の前に個人として立つのではなく、信仰によって互いに一つに結ばれ、神の民の一員として礼拝に繋がります。公同性の証しとして、改革教会の信仰を継承する信仰告白をし、共同の祈りと賛美をささげ、聖礼典の恵みに共にあずかります。主の日ごとの礼拝に加えられるわたしたちには教会の公同性に連なる一員としての自覚が求められます。

公同性は個別の教会の一致に留まらず、全世界の教会の一致を目指す広がりを持っています。説教前の長老の祈祷において全世界の教会のための祈りがささげられるのはこのためです。

日本キリスト教会は改革教会の信仰の伝統を継承するものとして独自の「日本キリスト教会信仰の告白」を保有しています。教派性は排他的な分派を意味するものではありません。地上の教会には教派を成立させる歴史的、社会的背景があり、これらを軽視することはできません。しかし、教会が聖書のみことばに忠実であるとき、あらゆる教派を超えてキリストにあって一つであることをわたしたちは信じます。わたしたちの教会は教派的自覚を持って公同性を目指しています。

教会では結婚式や葬儀式などは礼拝として行われます。いずれも主の日の定められた礼拝に準じて行われます。

II. 礼拝式順について

日本キリスト教の礼拝観と長年守られてきた札幌北一条教会の礼拝式を踏まえ、当教会の

礼拝式順を以下の様に定めます。

前 奏
招きの詞
讃美歌
信仰告白
讃美歌
聖 書
祈 り
洗 礼、（小児洗礼者の）信仰告白、
入会、長老任職、執事任職、
日曜学校校長・教師任職
讃美歌
説 教
祈 り・黙 想
讃美歌
聖晩餐
讃美歌
献 金・祈 り
主の祈り
頌 栄
派遣・祝福
後 奏
報 告

III. 礼拝構成要素について

1. 前 奏

奏楽は神学的には会衆の心をみことばへと向けるためのオルガン演奏の奉仕であり、奏楽として当日演奏される曲名は週報に記載され、礼拝全体を導くものです。

前奏はこれから始まる礼拝に向かって心を整え、特にみことばを聴くことへと礼拝者の心に向けさせます。前奏に用いられる曲は、その日の礼拝説教や聖書の箇所にあふさわしいもの、教会歴に沿ったものなどが選ばれます。このため礼拝者は奏楽が始まるまでに着席し、奏楽に

耳を傾けたいものです。

2. 招きの詞

教会は、ギリシャ語で(エクレシア)と言い、(集められた者たちの群れ)という意味を持っています。教会は、特に礼拝において、神によって集められたものとしての姿をあらわします。神が、ご自身の民をこの教会へと招いてくださることを示すのが「招きの詞」です。礼拝は神が主催されるものですから、「招きの詞」で始まります。

「招きの詞」が告げられるとき、聖書を開く必要はありません。畏れと喜びをもって神の招きを聴き、これに応える内的・外的姿勢(起立)が大切です。

3. 讃美歌

詩編 102:19 に「主を賛美するために民は創造された」とあります。さらに「主に従う人よ、主によって喜び歌え。主を賛美することは正しい人にふさわしい。」(詩編 33:1)とあります。それゆえ、賛美は礼拝を構成する重要な部分といえます。旧約の民イスラエルの集会以来、教会はこの「神への賛美」を歌うことによって表してきました。

改革・長老教会では伝統的に詩編歌が歌われてきました。それは自由詩によるものが個人的主観や感情におぼれやすいことに注意し、神を賛美するにふさわしい言葉は聖書に、特に詩編の中にあるという考えに基づきます。今日、詩編歌は礼拝において用いられることは少なくなりましたが、どのような讃美歌を選ぶかという課題は、今なお与えられ続けていると考えます。この課題のもと、札幌北一条教会では自らの教会で生み出した讃美歌も歌われます。これは、絶えず改革されてゆく改革教会の伝統によります。この讃美歌の歌詞や題名については小会が決定します。

札幌北一条教会では様々に検討をしてきた結果、1954年版の日本キリスト教団出版の『讃美歌』とこれを補完する意味で『讃美歌第二編』を用いることとしています。『讃美歌』・『讃美歌第二編』の歌詞には難解な言葉や敬語として皇室・神道用語が多く見られますが、信仰的意味を理解して歌う必要があります。

札幌北一条教会の礼拝においては、会衆は声を合わせ、心をつにして賛美をし告白をするという考えから、讃美歌は斉唱を原則とします。斉唱の困難な方の場合にはオクターブ下げて歌うなど、それぞれの事情に応じた賛美がなされるようおすすめします。

讃美歌 1. 「招きの詞」の後の讃美歌は礼拝における神の招きに応答し、神を讃える讃美歌です。わたしたちはこの讃美歌によって神への崇敬と賛美をささげます。この目的のため、札幌北一条教会ではこれにふさわしい讃美歌を用いています。

札幌北一条教会においては礼拝の始めに頌栄が長らく用いられ、1984年以降これが讃詠に変わりました。讃詠は主として詩編に旋律を付けて歌うもので『讃美歌』に17曲が収められています。しかし現在では讃詠という表記と共に、このタイプの讃美歌が用いられることは少なくなりました。日本キリスト教会の礼拝式に関する指針(1967年)、試案(1998年)においては、「招詞」の後は「讃美歌」となっています。かかる状況を考慮し、2014年3月より「讃詠」の表記を「讃美歌」に変更します。

讃美歌 2. 説教前の讃美歌は、多くは神に関するものや礼拝に関するものから、選ばれています。創造のみ業を成し遂げられた神、み子イエス・キリストにおいて救いのみ業を完成された神、三位一体の神として今もすべてを治めておられる神、わたしたちを礼拝に招いてくだ

さった神, そのような神への心からなる崇敬と賛美と感謝を歌うもので、「礼拝の歌」と言われています。

讃美歌 3. 説教後の讃美歌は説教の内容に応じて選ばれ, みことばに対する力に満ちた応答, 喜びに満ちた献身の決意, 派遣される者の使命等を内容としたものが多く用いられます。それは説教において聴いた神のみことばの実践を歌として言い表しているもので、「宣教の歌」と言われています。

讃美歌 4. 頌栄は三位一体の神に栄光を帰し, そのみ名をほめたたえ礼拝をしめくくる讃美歌です。札幌北一条教会の礼拝では三位一体の神を讃美することばが示されている曲を選曲しています。これは礼拝において恵みを与えてくださった三位一体の神への賛美であり, さらに神に対する感謝の応答です。主の祈りが「国と力と栄えとは・・・」という頌栄で閉じられているのに似ています。この感謝の応答は, わたしたちが全面的に神に依存していることから生まれてくるものです。こうして感謝の応答をもって神に心を向けつつ, 次の「派遣・祝福」のことばを聴く備えをします。

4. 祈り

祈り 1. 説教前の祈りは司式者が礼拝者を代表して祈るもので, 主として以下の4つの内容によって構成されます。

I. 「神の招き」に感謝する祈り

II. 崇敬と聖霊の導き

これは信仰の告白であり, 神への賛美と感謝が告白される。さらに礼拝者がみことばを正しく聴くことができるための聖霊の導きを祈る。

III. 罪の告白と赦し

神の前に立つ会衆は罪を告白し, 赦しを賜ることによって, 礼拝者として整えられ, みことばを聴き, 神への賛美と祈りへと導かれます。「罪の告白と赦し」として札幌北一条教会では従来交読文が用いられてきましたが, 罪の告白をより明確に表明するため司式者が会衆を代表して祈ることに変更されました。「罪の告白」は神の前に謙虚に立つ信仰者としての悔い改めであり, 「罪の告白」によって「罪の赦し」が与えられるものではありません。神の憐れみと主の十字架の赦しによって, わたしたちは悔い改め, 救われた者とされます。

IV. 執り成しの祈り

これは全世界の人々の救いや平安を求める祈りです。この祈りは個人的なものとしてではなく, この世の課題を担う教会の公同の祈りとしてささげることが大切です。この祈りには「例外的な状況」だけでなく, 平常の事柄のための祈りも含まれます

祈り 2. 説教の後には, 説教者の祈りが続きます。この祈りは, 語られたみことばへの応答としての性格, すなわち, みことばに対する礼拝者の感謝や信頼の思い, また, みことばによって促された服従や献身への決断を言い表すものです。この祈りの後に, 札幌北一条教会では教会独自の取組みとして静かにオルガンが奏でられ, 一人ひとりがみことばを黙想する短い時が与えられます。

祈り 3. 献金に続いて, 礼拝者を代表して献金奉仕者の一人が祈りをささげます。札幌北一条教会では長老が祈ります。その基本的内容は「主よ, この献金を, わたしたちの献身のしるしとして, みこころに従ってあなたのご用のためにお用いください」です。

このような奉獻の志を明らかにするために、その日の礼拝説教において聴いたみことばへの応答や服従の決意が短く祈られることがあってもよいでしょう。これらの祈りが冗長や形式化することがないように心がけたいと思います。

主の祈り 主の祈りは主イエスが弟子たちに教えられた祈りです。聖書に記されている主の祈りには結びの部分(国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり)がありません(マタイ 6:9-13, ルカ 11:2-4)。しかし、わたしたちが用いている主の祈りにはこの部分があります。このことはキリスト教会が早い時期から主の祈りに頌栄をつけて礼拝で用いてきたことに起因します。

主の祈りはその詩文的構造が礼拝において会衆が声を合わせて祈ることに適しています。また、「われら・・・」という語の繰り返しは、この祈りの共同体的・教会的性格を示しています。そのような理由で、主の祈りは礼拝において会衆が心を一つにして祈る祈りにふさわしいものであることがわかります。

主の祈りは「世界を包む祈り」(H. ティーリケ)とも言われます。それは世界の様々な状況にあっても、人々が共通に祈ることができる祈りだからです。また、わたしたちが人間として祈るべき本質的な課題がこの祈りの中に含まれていると言ってよいでしょう。

初めの三つの祈り、すなわち、み名、み国、み心を祈ることによって、教会の宣教の課題が明らかにされています。後半の三つの祈りは日用の糧、罪の赦し、誘惑や試練からの解放についての祈りで、これによって神の恵みの中で生きる人間の共生や執り成し(和解)の課題を覚えるとともに、神の助けを求めています。キリスト者は、具体的な日常の状況の中で、この祈りを実践するものとして、礼拝からこの世へと

派遣されていきます。

宗教改革者のルターは主の祈りがあまりにも軽率に乱用されていることに警告を發しています。わたしたちもこのことを心に留め、主の祈りをするのが求められています。

礼拝においてはこの祈りの速さが問題であると指摘する人もいます。礼拝式においては司式者の祈りの言葉に全会衆が声を合わせ、一語一語丁寧にその内容を意識して祈ることが求められています。

5. 信仰告白

礼拝は神の招きに対する応答的・対話的性格を持っています。それを表す礼拝要素として、讚美歌、祈り、信仰告白、献げものなどがあります。

札幌北一条教会では信仰告白として「使徒信条」と、使徒信条を含む「日本キリスト教会信仰の告白」(聖礼典が行われる礼拝において)が用いられています。

「使徒信条」は4世紀初めに定式化され、その後今日まで、広く世界の教会において公同の信条として唱えられてきました。日本キリスト教会は憲法において「使徒信条」と改革教会の信仰告白に言い表されている信仰を継承していることを表明しています。

「日本キリスト教会信仰の告白」は改革教会の信仰告白を前文とし、これに「使徒信条」を加えたもので、全体として一つの告白をなしています。現在、札幌北一条教会では2007年に制定された口語文の「信仰の告白」が用いられています。

教会は宣教共同体であると同時に告白共同体でもありますから、自分たちの信じる神への信仰を公に告白することは当然のことです。これによって神がイエス・キリストにおいてなしてくださった救いのみ業に対するわたしたちの信仰における認識と感謝と賛美が告白され

ています。信仰告白は神に対してなされる応答だけでなく、教会の内と外とに対しての「教会の信仰」の表明です。

6. 罪の告白と赦し

札幌北一条教会の礼拝では2007年2月まで讃詠に続いて賛美、祈り、「罪の告白」などを内容とする詩編が交読文として用いられてきました。しかし、同年3月以降は交読文に代わって信仰告白がなされるようになりました。

礼拝は神の招きに対する応答的、対話的性格を持っています。応答を表す讃美歌、祈り、献金と共に交読文は特に対話的性格のものとして従来広く用いられてきました。

日本キリスト教会大会「信仰と制度」に関する委員会(1998年大会報告)は、礼拝順序(案)として招詞、讃美歌に続いて「罪の告白と赦し」を位置づけ、神の招きに「罪の告白」と「赦しの宣言」が伴うことによって、わたしたちは礼拝者として整えられること、「罪の告白と赦し」には「悔い改めの詩編」を交読文として用いることを提案しました。

交読文の扱い— 札幌北一条教会においては交読文に代わって現在は信仰告白がなされるようになりました。すなわち定められた詩編を全員が交読するよりは、一人ひとりの礼拝者が自らの祈りにおいて「悔い改め」をなすことが「罪の告白」としてよりふさわしいと判断しました。この会衆の祈りを合わせるものとして説教前の長老の祈りを位置づけることが大切です。

さらに「罪の赦し」については、使徒信条および「日本キリスト教会信仰の告白」において十字架による罪の赦しが告白されています。この告白をなすとき、わたしたちは赦しの恵みを受け入れる者とされます。ちなみに1967年の教義研究委員会の「礼拝式順序に関する細かい

指針」においては交読文の位置に信仰告白が位置づけられています。

交読文の果たしてきた今一つの役割として、司式者と会衆の交互の交読は神への応答と同時に礼拝者相互の信仰の一致を強めるものとされてきました。この一致は会衆が信仰告白を共にすることによってなされています。

改革教会の礼拝において詩編は唱える詩編(交読文)と歌う詩編(詩編歌)として重んじられてきました。詩編を礼拝においていかに用いるかは今後の課題とされます。

7. 聖書

聖書(朗読)は礼拝の中での最も重要な要素です。なぜなら、その日の礼拝において、わたしたちに語りかけられる神のことばが聖書朗読をもって与えられるからです。そしてこの神のみことばを説きあかす説教がなされます。聖書朗読は、正しく明瞭になされなければなりませんし、会衆も神が語られることばとして、これを聴きます。

8. 説教

説教とは

プロテスタント教会では礼拝において聖礼典が正しく執行され、聖書の説き明かしである説教が行われることが教会の根本であるとされます。このように説教は聖礼典とともに礼拝の中心的役割をもち、改革教会では伝統的に説教に力を注いできました。

神はみこころをことばによって明らかにされます。神のことばは第一にイエス・キリストであり、そしてイエス・キリストを証しする聖書が「神のことば」です(日本キリスト教会信仰の告白)。さらに説教は教会と世界に向け神のことばを取りつぐものであり、今に生きる神のことばです。したがって、説教はつねに聖書

に基づき、聖書に忠実であることが求められます。礼拝に参加するわたしたちは説教を通して神のことばを恵みとして与えられます。神のことばを語る務めを持つ者と聴く務めを持つ者が「今わたしたちは皆、主があなたにお命じになったことを残らず聞こうとして、神の前にいるのです」（使徒 10:33）との思いをもって説教に臨むことが大切です。

説教はその内容や形式によっていくつかに分類されますが、わたしたちの教会においては聖書のテキストをもれなく解釈し、そこからメッセージを読みとって語る講解説教がなされています。

語る者と聴く者

説教、すなわち神のことばの宣教は、主から教会に委託された教会の務めです。その務めを教会は神のことばの奉仕者としての説教者に委ねます。日本キリスト教会では、宣教の務めを委ねられ教会・伝道所に遣わされる教師を牧師と言います。

説教は説教者の個人的なことばではなく、教会の宣教のことばであり、神の福音を告知するものです。そのために聖霊の助けを祈り求めなければなりません。説教者には語ることばに対する厳しい吟味が求められます。また、聴く者は説教に対して謙虚に耳を傾け、みことばを受け入れることが肝要です。わたしたちの教会では説教に続いて短時間、オルガンが奏でられる中、みことばを想起する黙想のときをもっています。続いてみことばに対する応答として讃美歌が歌われます。

生き生きとした説教を生み出すために、教会員は説教者との間で説教についての対話や、説教について共に考えることがあってもよいでしょう。「良い聴衆は、よい説教（者）をつくる」（R. ボーレン）のです。

9. 聖礼典

聖礼典とは

神の恩寵が見える形で実現される具体的な恵みの業をサクラメント（ラテン語 *sacramentum*）といい、これは古代の教会から絶えることなく執り行われてきました。宗教改革以後、プロテスタント教会においては、イエス・キリストによって制定された洗礼（マタイ 28:19）と聖餐（マタイ 26:26—28）の二つをサクラメントとし、これを礼拝における中心的礼典として重んじてきました。日本のプロテスタント教会においては、この二つのサクラメントを総括して「聖礼典」という言葉を用いています。

洗礼と聖餐が聖礼典とされるのは神が語られるみことばとともに、この二つの礼典がイエス・キリストによる救いの事実と約束とを目に見える形として具現しているからです。すなわち、洗礼においては水が、聖餐においてはパンとぶどう酒（液）が用いられています。これは「目に見える神のことば」（アウグスティヌス）と言われることもあります。洗礼は信仰の歩みがそこから始まる「開始の聖礼典」として、聖餐はその信仰を保つ「維持の聖礼典」として位置づけられます。

洗 礼

洗礼には水が用いられます。水が汚れを洗い流すように罪が洗い流されること、それは、人が水の中に沈むと死ぬように古い自分に死んで、新しい自分が誕生することを指し示しています。そのように洗礼をとおして、人はキリストに結ばれて罪の赦しと新しい命を与えられ、教会の一員とされます。

洗礼を受ける者には、イエスを自分の主、救い主として信じる信仰が求められます。その信仰は、人の決断や信仰に先立って神ご自身がわ

たしたちを選び、救いへと導いてくださる恩寵によります。

小児洗礼については教派間で意見が異なりますが、日本キリスト教会では恩寵の先行を信じ、小児洗礼を行います。その根底には信仰者の家庭に生まれた小児は、その家庭（親）に与えられている救いの約束の下で神から授けられたものであるという理解があります。親は信仰をもってわが子を神の救いのしるしとしての洗礼にあずかせます。親と教会は小児洗礼者を自覚的な信仰に至るよう養育する責任を負っています。小児洗礼者は家庭や教会の交わりの中で、自分に授けられている洗礼の意義に目覚め、その信仰を公に（礼拝において）告白します。それが信仰告白であり、これによってその人は聖餐にあずかる者（陪餐会員）とされます。

洗礼の行われる礼拝においては、新しく信徒の群れに加えられた人を教会は感謝と喜びをもって迎え入れ、洗礼に引き続いて共にみことばを聴き、聖餐の恵みにあずかります。そのため、説教前に洗礼が執り行われます。

新共同訳聖書では洗礼に〔バプテスマ〕の振り仮名が付けられていますが、日本キリスト教会では「せんれい」が公式用語として用いられます。

なお、聖礼典ではありませんが、小児洗礼者の信仰告白、入会、長老任職、執事任職、日曜学校長・教師の任職が行われる場合は、説教前のこの部分において行われます。

聖晩餐（主の晩餐）

初代教会においては、信徒たちは毎日常ごとに集まり、パンを裂き、喜びをもって食事をし、祈ることに熱心であったとあります（使徒2:42-46）。これが週の初めの日の礼拝における「主の晩餐」の儀式として制定されました（コリント I. 11:23-26）。「主の晩餐」は主がわた

したちと共にいまし、その食卓に招いて下さる祝宴であり、神の民であるわたしたちに与えられる喜びであります。そして、「主の食卓」を共にすることを通して、主にある一致と交わりが深められます。同時にこの出来事は主の十字架の贖罪と犠牲を表わすものであり、主の復活のいのちにあずかり、終わりの日の祝宴をあらかじめ告げる礼典です。

初代教会に続く2世紀以降において、教会では「the Eucharist」（ギリシヤ語 eucharistia 感謝）がこの礼典を表す教会用語として広く用いられるようになりました。これは古代世界の異教祭儀と区別し、主の犠牲を強調するようになったためとされています。

「the Eucharist」は「聖餐式」・「聖餐」と翻訳され、日本のプロテスタント教会で広く用いられてきました。しかし、札幌北一条教会では2007年2月以降、「聖餐」に代わって、「主の晩餐」を意味する「聖晩餐」という用語が用いられてきました。

「主の晩餐」という呼称はパウロによって「コリントの信徒への手紙一」11章で用いられました。「コリントの信徒への手紙一、二」が書かれた当時（A.D. 50年代）、すでに原始教会ではイエスの死を記念する食事が一定の形をとり、「主の晩餐」として伝えられつつありました。

パウロは「コリントの信徒への手紙一」において、イエスがパンをとり、さらに杯をもって語られたとされる言葉を伝え、これは「制定語」として定式化され、今日に受け継がれてきました。さらにパウロは「主の晩餐」は

- ・「主の死」を告げ知らせるもの
（コリント一、11-26）
- ・主の死によって立てられる「新しい契約」
（コリント一、11-25）
- ・「主の記念」として行うこと
（コリント一、11-25）

を記し、信徒はこれに「ふさわしく」対応することを強調しています。このような聖書の言葉から、わたしたちの教会では、礼拝における礼典としての「主の晩餐」（「聖餐式」・「聖餐」）を表すのに「聖晩餐」と表記しています。

配餐の方法は教会によって異なりますが、わたしたちの教会では静かなオルガン曲が奏でられる中、長老によってパンと杯が配餐され、会衆は自分の席で座ったままでパンと杯を受け取ります。配餐においては「受け取る」行為が第一に必要なことですが、同時に主の献身と犠牲に対する応答としてわたしたちの「ささげる」決断も不可欠な要素です。

聖晩餐は通常、教会の礼拝において行われます。しかし、今日のようにその場に臨めない高齢者や病床に臥している信徒が多い状況では、病床や在宅での聖晩餐が教会の重要な務めとなってきました。この場合、多くの信徒が共に連なり、参列者が互いに主の交わりに加えられていることを確信できることが大切です。

10. 献金・祈り

献金は礼拝式において説教や聖礼典の後に位置づけられるのが一般的です。それは、礼拝式全体を通して与えられる、罪の赦しや新しいのちの約束を中心とする神の恵みに対するわたしたちの喜びと感謝を表すものであり、みことばに従って生きる献身を表すものだからです。そのために、お金をささげるという印象の強い「献金」という用語よりは、自らを神に仕える者としてささげる「奉獻」とする方がふさわしいという指摘もあります。このことを配慮して、献金に続く感謝の祈りにおいて献金の精神に基づく祈りがささげられます。

11. 派遣・祝福

札幌北一条教会では1998年3月まで礼拝の最後に神の祝福を祈り求める祝祷がなされて

きました。しかし、同年4月以降、祝祷に代わって「祝福と派遣」となり、現在は「派遣・祝福」の表記がなされています。1998年の変更は、日本キリスト教会大会「信仰と制度」に関する委員会の礼拝順序（試案1998年）に沿ったもので、礼拝が神の招きに始まり、神の恵みを新たに受けた信徒が、再び祝福を受けてこの世へと遣わされる（Sending Forth）ことを明らかにするものでした。

派遣とは

復活の主は弟子たちを前に「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（ヨハネ20：21）と告げられました。弟子たちの派遣のように、わたしたちも礼拝の終わりに、神によってこの世の生活へと送り出されます。

礼拝は一回一回が完結したものであると同時に、次の礼拝に向かうものでもあります。信仰者はみことばの証人、告知者として礼拝からこの世へと遣わされ、そして次の礼拝に新たな招きを受けて集います。派遣の言葉は、礼拝を宣教との関連で捉えることの大切さを示しています。

派遣の言葉としてよく用いられるものは、アメリカ長老教会の次の言葉です。「平和のうちにいなさい。自由な者として生き、聖霊の力に包まれて、喜びをもって主に仕えなさい。」

祝福とは

「派遣の言葉」に続いて「祝福の言葉」が与えられます。この部分は本来祈りというよりは、神から礼拝者に向かって与えられる祝福と平安の告知という性格のもので、したがって祝福は神からわたしたちに与えられる恩寵であり、この世へと派遣されていくわたしたちの日々の生活は、神の祝福と守りのもとにおかれています。この約束がわたしたちの一週間の全

生活を支えます。

祝福の言葉は聖書の中に多く見いだすことができますが、代表的な聖句として「アロンの祝福」（民数記 6：24-26）と「三一論的祝福」

（コリントⅡ13:13）の二つがあります。派遣・祝福は聖霊の具体的な働きを教会員に指し示すため挙手をもって伝えられ、日本キリスト教会では教師のみがこれを行います。教会員は起立して「アーメン」をもって、これを受けます。

教派によっては「派遣と祝福」、「派遣の祝福」などの表現が異なりますが、派遣される信徒に祝福が告げられることから、札幌北一条教会では「派遣・祝福」とされています。

1 2. 後 奏

礼拝を通して与えられた主の恵みに感謝し、新しく示された使命に向かってこの世に派遣される信徒を力強く送り出すために演奏されます。それゆえ「礼拝の後奏曲は宣教への前奏曲である」とも言われています。ここでも教会暦に沿った曲などが演奏され、後奏にも重要な役割が与えられています。

1 3. 報 告

報告は自教会と全体教会の働きに不可欠な役割を担うものです。報告の主な内容としては以下の4項目が挙げられます。

1. 聖礼典の執行, 日本キリスト教会の憲法に規定される教会会議の公告
2. 中会, 大会を含む教会の諸活動についての報告
3. 教会員の消息
4. 礼拝を共にした他教会員の紹介

これらの報告に基づいて、教会の働きや交わりの具体的な内容が示され、教会員の祈りと奉仕が導かれます。

報告1, 2, 3は週報に記載され、教会員は必ず目を通すものとされますが、追加事項や確

認のため当日の当番長老による簡潔な説明が付せられます。なお内容によってはその集会などの担当者が行うこともあります。

奏楽全般について

前奏・後奏・讃美歌の他に、札幌北一条教会では説教後の黙想、聖晩餐の配餐、献金の時に、静かなオルガン曲が奏でられます。

奏楽は会衆の祈りを支えると同時に音楽自体がその意味を持っています。すなわち、演奏に用いられる曲は信仰的ならびに芸術的に優れた教会音楽の作品であり、演奏をとおして礼拝に音楽固有の豊かさを与える役割を果たしています。このためわたしたちの教会においては優れたオルガンが設置され、オルガンの演奏が重んじられてきました。会衆はかかる教会音楽の意義を理解して礼拝に臨むことが求められます。

黙想においては、会衆はそれぞれの思いを持って祈り・黙想しています。奏楽はその助けとなるようにその日のみことばに応えられるよう演奏されます。

聖晩餐においては、会衆は主の食卓に招かれていることの喜びと感謝、罪の悔い改めが求められますので、奏楽はそのことを導くにふさわしい曲が演奏されます。奏楽は、会衆の祈りの支えとともに、それ自体が祈りの音楽といえます。

献金は神のご用に用いて頂くという、献身の意味合いがあります。このため、奏楽そのものも神にささげるという思いで演奏されます。

付録) 札幌北一条教会の礼拝式順の変遷

1998/3月まで	1998/4月～ 2007/2月	2007年/2月～ 2014年2月	2014年3月から	日本キリスト 教会式文 2000年改訂
奏 楽	前 奏	前 奏	前 奏	
開会の祈り	招きの言葉	招きの詞	招きの詞	招 詞
頌栄 (讃詠 1984-)	讃 詠	讃 詠	讃美歌	讃美歌
主の祈り				
交読文 (1972-)	交読文	信仰告白	信仰告白	罪の告白と赦し
聖 書	聖 書	聖 書	聖 書	聖書朗読
		洗 礼	洗 礼	
説 教	説 教	説 教	説 教	説 教
聖礼典 (洗礼式・聖餐式)	聖礼典 (洗礼式・聖餐式) (洗礼・聖餐 2002-)	聖晩餐	聖晩餐	聖礼典 (洗礼・聖餐)
報告補遺 (報告 1975-)				
献 金	献 金	献 金	献 金	献 金
	主の祈り	主の祈り	主の祈り	主の祈り
祝 禱	祝福と派遣 (派遣・祝福 2002-)	派遣・祝福	派遣・祝福	祝福と派遣
後 奏	後 奏	後 奏	後 奏	
報 告	報 告	報 告	報 告	

讃美歌・祈りなどは省略した